

東日本における群集墳の研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2013-05-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 初重, 小林, 三郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/14425

東日本における群集墳の研究

大塚 初重, 小林 三郎

A study of Collective Tomb in
Eastern part of JapanHatsusige OHTSUKA,
Saburo KOBAYASHI

1984年以来、長野県大室古墳群の調査を継続して来たが、その調査結果からみると、東日本におけるいくつかの群集墳には、その成因による群構成の差違があることが推察できるに至った。いうまでもなく、大室古墳群は、積石塚古墳をその特徴とし、その墓制や被葬者像の中に、大陸や半島の影響、およびその渡来集団とのかかわりを抜きにしては語れぬ内容をもっていると解される。日本の古墳時代の墓制としての伝統的な「古墳」が群集して存在する場合との比較において、大室古墳群の特質は大いに発揮されよう。

一方、伝統的な古墳の群集する例は、全国各地に、規模の大小はあるにしても存在し、各々、地域の特色を表わしつつある。とはいっても、一群集墳の成立から終焉までを明らかにした調査例は少なく、いまだに、群集墳の群構造や、被葬者とのかかわり、各地域にのこる集落遺跡との直接的な関連を把握するに至っていない。

近年、考古学的調査の進行にともない、いままでも不明確であった東北地方南部、ことに日本海側に近い地域の群集墳の存在が明確になってきた。群集墳研究の総合的な立場はもとより、大室古墳群との比較対象としても有意義な資料を獲得すべき調査を実施したいと念願していた。

調査対象として、山形県東置賜郡川西町にある下小松古墳群を選定した。下小松古墳群は、大塚が1980年に最初の踏査を試み、以後継続して予備踏査をおこない、1983年以後は川西町教育委員会による分布調査の開始、部分的な発掘調査もはじめられた。

1990年度からは、明治大学考古学研究室と川西町教育委員会との共同調査という形をとり、発掘調査を開始することになった。

調査の目的

下小松古墳群の立地する丘陵の東側に展開する米沢盆地西縁には、眼下に前方後方墳の天神森古墳がある。1983年の調査によって全長75.5mにおよぶことが確認

され、後方部やくびれ部から底部穿孔壺形土器片が出土した。土器の特徴から4世紀末から5世紀初頭の年代が推定されている。現在のところ当地方でもっとも古い古墳である。しかし、通常前期古墳は丘陵上に造られるのが一般的である。そこで低地部にある大型の前方後方墳の天神森古墳に先行するような古墳が、丘陵上の下小松古墳群中に認められるのかどうか問題となった。以上のことから、古墳群の形成時期を確認するために小森山支群第98号前方後円墳の調査を、明治大学考古学研究室と川西町教育委員会との合同で発掘調査を行うことになったのである。

古墳群の概要

下小松古墳群は、山形県東置賜郡川西町下小松に所在する。米沢盆地北西部の標高270~280mの丘陵地帯に立地し、尾根上や尾根の東南側の緩傾斜面に展開している。古墳の総数は200基にも及ぶ東北きっての古墳群で、丘陵の南から尼が沢支群、小森山支群、鷹待場支群、薬師沢支群、永松寺支群の5つの支群に分けられている。

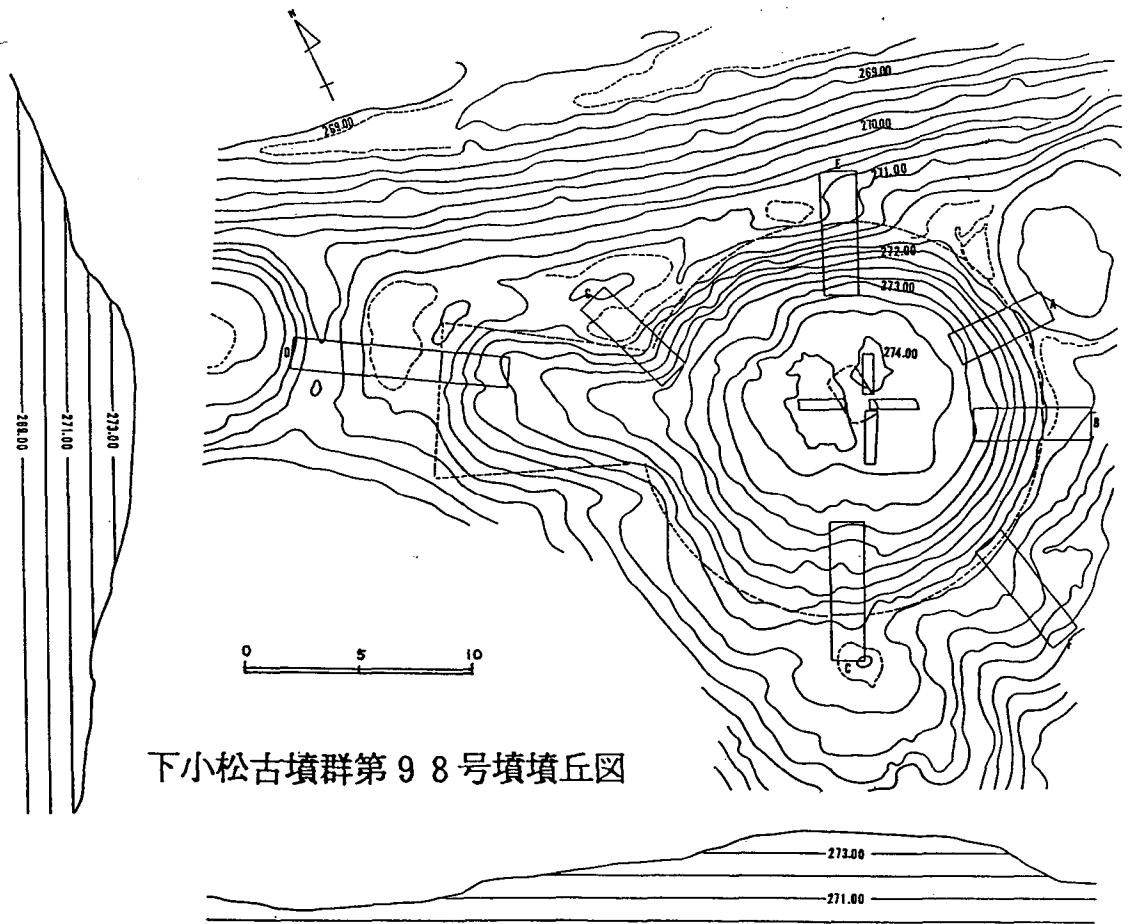
下小松古墳群は、地元の研究者の間では中世の山岳宗教の修験道に関係する「塚」であるとされてきた。しかし、当地を訪れた大塚はこれらの中に前方後円形をしているものがあることに注目し、これらが古墳群であることを示唆した。その後、川西町教育委員会では1983年以後分布調査を開始し、その結果「塚」群であるとされてきたものが、前方後円墳15基を含む総数200基にも及ぶ古墳群であることが判明したのである。さらに1985年からは小森山支群61号墳、64号墳、65号墳、鷹待場支群105号墳、106号墳、186号墳の発掘調査を実施している。その結果、前方後円墳である61号墳では後円部に木棺直葬の主体部が2例検出され、周囲の溝から土器が出土した。内部構造や副葬品、土器の特徴からみて5世紀後半から6世紀初頭の年代が考えられている。

調査の概要

今回の発掘調査では、第98号墳の墳丘の基礎データを得ることを目的とした。墳丘観察では、後円部に比べて前方部が低く短いという墳丘の形態としては古い特徴が見られた。また、後円部の北東側が直線的で、前方後方墳である可能性も持たれた。そこで墳丘の旧状の形態と規模を確認するために計7本のトレンチを設けた。その結果、墳丘の周囲には、幅約1.6m・深さ約0.6mの小溝が巡ることが確認された。この小溝は、以前調査された第61号墳でみられたものと同様のものである。そこ

で、後円部に設けた各トレンチで検出された小溝をつなげてみると、計 17.5 m の円が描けることが判明し前方後円墳であることが確定したのである。全長は 26.5 m である。また、墳頂部にサブトレンチを入れたところ、地表下 0.5 m の深さで主体部の一部とみられる落ち込みの平面プランが確認できた。詳細は来年以降の発掘調査を待つこととする。

遺物は墳頂部表土中より須恵器片が 1 点、E トレンチの小溝より土師式土器が 1 点出土している。須恵器片は小片のため詳細は不明だが、土師式土器は小型の杯形土器で内面が黒色を呈している。この土器の特徴をみるかぎり 5 世紀の終末から 6 世紀前半という年代が得られるが、内部主体の調査を行っていない現状ではそのまま古墳の築造年代に当てはめるのはひかえたい。



下小松古墳群第 98 号墳墳丘図